

東京バッハ合唱団 月報

[第 552 号] 2008 年 6 月

〒156-0055 東京都世田谷区船橋 5-17-21-101 Tel : 03-3290-5731 Fax : 03-3290-5732
E-mail : bachchortokyo@aol.com http : //www2.tky.3web.ne.jp/~bach/chor/

BACH-CHOR, TOKYO

Monthly Newsletter No.552

June 2008

5-17-21-101 Funabashi,
Setagaya-ku, Tokyo

若林敦盛[訳] 『対訳 J.S.バッハ声楽全集』 推薦のことば

佐々木 正利

キリスト教が他の宗教と違って音楽を重用しているのは周知のことですが、それは何故なのでしょう。そのヒントは神像、カリスマ的な人間の像、超常的な自然構造物などの偶像を崇拝するか否かにあります。我が国のいたるところでは、山や大木、滝などの自然を信仰し、神棚に手を合わせ、仏様を拝む光景が見られます。しかし、キリスト教では、創られた神、いわゆる偶像に対する崇拝を禁止しています。何故なら、キリスト教においては、神は唯一絶対の存在であり宇宙の創造者であって、人間や自然が創った物ではないからです。私たちがそのような神を創るなら、神はとたんに低次元で卑俗な存在となってしまうのです。尤も、ユダヤ教や実はイスラム教も、『旧約聖書』の出エジプト記 20 : 4、いわゆるモーセの十戒の第 2 「あなたは自分のために、刻んだ像を造ってはならない」に従い、偶像崇拝を禁じていますし、仏教においてさえ、釈迦は「私の姿を拜んでどうしようというのか」と偶像崇拝を否定し、その入滅後 200 ~ 500 年は仏像は存在しなかったのですけれども。

それはともかくとして、キリスト教においては、神と人とを結ぶのはことばであり、そのことばをより実効ならしむるために音楽が用いられます。ですから、パレストリーナも、バッハもモーツァルトもベートーベンもシューベルトもブルックナーも、まるで神様が宿ったように素晴らしい音楽を作り、私たちにその賜物を与えて下さったのです。彼らの音楽によって、私たちは癒され、浮き浮きし、熱くなり、励まされ、心慰められます。そう、音楽は目に見えない神様からの最大の贈り物なのです。

私は、中学生の頃から音楽を好んで聴くようになりました。特に好きだったのがショパンとチャイコフスキーでしたが、高校に入ってから合唱に取り組み、パレストリーナ気違いとなって、ついにはパレストリーナを芸大で歌いたい、と入学してしまいました。パレストリーナのどこが好きだったか。それは、あの柔和で透明なハーモニー、幸福感に満たされた心安らく響きが故でしたが、学生運動の波にもまれる若者にとっては、心和むいのちの水となりました。しかし、音楽の心地よさに酔いしれてはいたものの、歌詞の内容にはまったく興味が湧

かず、精々「鹿が泉の水を慕うように私の魂も主を慕います」程度の歌詞に心を動かす不届き者でした。

さて、まもなく私は自分の失敗に気づくことになりま。というのも、芸大にはパレストリーナを歌おうなんていう奇抜な人間はいなかったのです。そこで仕方なく始めたのがバッハです。何故ならば、バッハなら声楽科の連中もソロに繋がるから興味を示してくれるだろうし、また器楽の連中ともいっしょに活動ができるからです。しかし、始めてみてすぐ新たな問題に直面しました。ドイツ語ができないし、わからないのです。さすがに私も、芸大生になってからは歌詞の意味もわからないで歌うということはしなくなっはいたのですが、普通の歌だっ

新刊のご案内 『対訳 J.S.バッハ声楽全集』

大村 恵美子

軽い雨から眩しい陽射しに移りゆく初夏の一日、アルトの佐々木まり子さんと 6 月 21 日の定演に備えてお会いした。

今回は、なんとといっても大作の独唱カンタータ BWV169 《神にのみ わが心献げん》をお聞かせくださる。前半のステージでも BWV102 の第 3 曲アリア 嘆かわし 痛みを忘れし魂よがあるし、独唱カンタータに始まる後半でも、つづく BWV182 に、曲の中心に据えられた大きなダカーポ・アリア つどえ主のもとに が待っている。この公演は、アルトの饗宴ともよぶべき舞台となる。事前の打ち合わせにも、大いに力が入らざるを得ない。

ところで、この日に、わざわざ携えてお持ちくださったのが、B5 判で 570 ページもある、当ページの佐々木正利氏ご推薦の大著である。標題のとおり、バッハ声楽作品の対訳歌詞を網羅したもので、その内容、訳者・若林氏のこと、佐々木ご夫妻とのかかわりについて等は、上の文章に詳細に紹介されているので、ここでは触れないが、バッハ声楽テキストの翻訳紹介という作業の、ことの大きさについては、私たち東京バッハ合唱団で演奏活動を日々行っているものにとっては、とりわけ身近に感じている。口語の直訳でまずテキストに向かい合うことができるのは、バッハの内容に接する第一歩である。みごとな装丁で世に出たこの一冊は、私たちの座右に欠かせないものとなるに違いない。

ぜひとも、このご努力の成果を多くの愛好家の皆さんにも知っていただきたく、この推薦文を転載させていただきたいとお願ひし、正利氏からご快諾をいただいたものです。

たなら日本版の楽譜やレコードが出ているから対訳がついていますし、また音源によって全体像もつかめます。しかし、当時はバッハのカンタータなんて国内盤はほとんどなく、また楽譜も図書館から旧バッハ全集を借り出して青写真をとって歌う有り様でしたから、畢竟自分で調べる以外にありません。この作業が困難を極めました。

結局、語学力とともにキリスト教の知識も薄く、恩師小林道夫先生の助力を得ながら悩み悩み訳していききましたが、こうした苦勞が一言ひとことに思いを込めさせ、歌う言葉にいのちが宿っていったような気がします。尤も、懸命に訳して心を込めて歌った歌が、後年になって国内盤が出て、そこに載った有識者による対訳を見たなら、私の訳はまったくのお門違いだった、なんていう笑えないエピソードもあります。

そんな時です。1972年からテレフンケンレーベルより刊行され始めたバッハのカンタータ全集は、私たちにとって神様からの素敵な贈り物となりました。何しろ、小さくはありましたが新バッハ全集によるスコア（総譜）と、バッハ研究の第一人者、東大の杉山好先生による格調高い全訳がついていたのですから。先生の訳は、文語調で少々難しくもありましたが、次々に出される新カンタータは先生の訳を得て我が物となっていきました。

文語調の訳といえば、当時小林先生は東京バッハ合唱団の指揮者を務められていて、度々その演奏を聴きに行ったものです。この合唱団、主宰者の大村恵美子先生による日本語訳でカンタータを演奏する特徴をもっていました。正直、聴いていて歌詞は聴き取れるものではありませんでした。しかし、後にわかったことですが、大村先生が日本語訳にこだわったのは、聴き手にことばをわからせることよりも、歌っている側がことばをリアルタイムにわかって歌うためとのこと。まさに正鵠を射たり、ですね。

さて、あれから30数年が過ぎました。私も、バッハ歌い、バッハ指揮者として一端の評価を戴けるようになりましたが、その間、バッハの声楽曲の全訳、しかも文脈を的確に把握した、わかりやすい口語調の訳は出ないかと待ち続けておりました。それがこの度、何と云えば身内の若林敦盛君によって成し遂げられたのですから、驚きとともに大いなる喜びとなりました。若林君は東北大学でドイツ語の研鑽を積み、在学当時から私の指導する東北大学混声合唱団と仙台宗教音楽合唱団に在籍し、演奏する楽曲の対訳を作ってくれていました。その訳は実にわかりやすく、時にキリスト教的慣用表現とは異なることもありましたが、しかし、それだけに宗派を越えた万人の視点で出来事を見つめ、自然な自分たちのことばで語りかけてくるのです。和訳する場合、文脈を損なわずに短くまとめるには、それこそ文語調の方が口語調に

優るのは自明のこと。しかし、彼の訳はその難点を見事に克服し、語るにリズムも抑揚もよく、まるでオリジナルが日本語であるかの錯覚すら覚えさせます。

私は、合唱団や声楽のレッスン生らに、詩をよく読み、理解して歌いましょう、と諭します。何故ならば、作曲家も必ずそうして作曲しているはずだからです。歌詞の意味や内容を理解することはもとより、歌詞を何遍も朗読してふさわしい抑揚やニュアンスが出てきた時、初めて曲の趣きが生かされるのではないのでしょうか。この朗読に際して、私は原詩だけでなく和訳も、しかも声を上げて読むように勧めています。というのは、日本語の方が感情移入しやすいと思われるからです。この点に即しても、若林君の訳は心に染み入るように自然なイメージを作り上げてくれるのです。

彼は、最近、日本語字幕の分野にも積極的に関わり始めました。字幕は簡潔さがモットーであるために、逐語訳にこだわらず意識を取り入れていく必要がありますが、それにしても原意は忠実に反映されるべきものです。その点でも、ベーター・シュライアーの『マタイ受難曲』の演奏会での仕事は見事なものでした。このように、彼は意欲溢れる勉強家ですから、今回の対訳集に不具合が見つかりましたなら積極的に指摘してあげて戴きたいと思えます。ことばは常に生きており、変化するものですから、より良い表現があれば彼は積極的に取り入れるはずで

若林君が、仙台宗教音楽合唱団とともに成長し、我が国のバッハファンに貢献できることを我がことのように嬉しく思い、これからも彼との共同作業を活発に展開していきたいと、団員一同の気持ちと合わせて、切に願っています。

（仙台宗教音楽合唱団常任指揮者・声楽家・岩手大学教授、東京バッハ合唱団団友）

【同著より、筆者のご承諾を得て転載】



若林敦盛[訳]
「対訳 J.S. バッハ声楽全集」
慧文社
2007年8月刊
税込み定価 8400円

東京バッハ合唱団の練習に参加

Dr. 古野ヨリ

クイーンズランド・バッハ協会合唱団 [Bach Society QLD Choir] のメンバーが東京に来たときには、いつでも練習に参加されたい、という大村恵美子さんのクリスマスメッセージにお応えして、わたしは最近、東京を訪れたおり(2月26日から3月7日)に、合唱団事務局の大村氏と連絡をとりました。彼からは、土曜の午後もしくは月曜の夕方の練習にどうぞ、というお誘いをいただきました。

そこでわたしは、3月1日(土)東京西部の世田谷にある私鉄駅 [東急田園都市線・桜新町駅] に近い世田谷中央教会の練習会場に出かけました。同合唱団の創立者であり指揮者でもある大村恵美子さんは、わたしの練習参加を歓迎してくださり、すぐれたアルト歌手である田中 [玲子] さんとならんで、最前列にわたしを立ててくださいました。そのときの練習は、来たる6月の定期演奏会にむけて、バッハのカンタータ第102番などでした。

練習後、近くの居酒屋での団員たちとの飲み会に同席するよう誘われました。そこでわたしは、そのお仲間と大いに楽しみ、その方々が、ブリスベンのわれわれのメンバーと同じようなキャラクターであることに驚いたのです。とてもくつろいでいて、寛容です。また皆さん、それぞれに興味深い経歴の持ち主でした。昨年3月にわたしたちがしたように、彼らも箱根への小旅行を計画していました。大村ご夫妻の60歳と77歳の誕生日を祝うためであり、どちらも日本の伝統では、重要な意義のある年齢と考えられているのです。同合唱団では、テノールのメンバーが不足しています。日本語でのバッハを経験したい方は、どなたでも参加してみてください、心から歓迎されることでしょう。

東京を訪れるに先立って、昨年11月に藤田正範氏が送った、われわれの2007年6月号のニューズレターとコンサートのチラシへの返書として、大村恵美子さんは季節のグリーティングカードを送ってくださいました。

藤田氏はまた、同合唱団から小包を受け取っています。その中には、Bach Soc. QLD のことと最近2回のコンサート、ハイドン《レクイエム》とバッハ・カンタータ2曲の上演、ヘンデル《メサイア》上演のことなどが紹介されている東京バッハ合唱団2007年12月号「月報」数部、および彼らの最近のクリスマスコンサート(2007年11月17日、第101回定期演奏会)の会場録音CDとリーフレットなども含まれていました。なお同合唱団は、昨年、創立45周年を祝ったところです。

大村さんからのグリーティングカード、上記の「月報」リーフレットなどをご覧になりたい方、CDをお聴きになりたい方は、どうぞマサノリ(正範)、キョウコ(京子)またはヨリにお尋ねください。

(クイーンズランド・バッハ協会ニューズレター「Bach in Five Minutes」2008年4月号)

Bach to Belonging : Members' News & Views

Participating in the practice session of Bach Tokyo Choir (Submitted by Dr. Yuri Furuno)
Responding to Ms. Emiko Omura's Christmas message inviting members of Bach Society QLD Choir to her practice session whenever we are in Tokyo, I got in touch with Mr. Omura, the administrator of the Choir, during my recent visit to Tokyo (26/2-7/3). He was happy to have me in the coming practice session either on Saturday afternoon or on Monday evening.

I went on Saturday the 1st March, and it took place at Setagaya Central Church located near the subway station in Shibuya district, west of Tokyo. Ms. Omura, the director and the founder of the choir was expecting me to join the choir and I was placed in the front row with one of the capricious alto singers, Ms. Tanaka. They were practicing Cantata 108 for their June concert.



After the session, I was asked to have a drink at a Japanese style pub near by with the choir members. I thoroughly enjoyed their company and amazed to find their characters reminded me so much of our choir members back in Brisbane. They were very relaxed, tolerant and having interesting backgrounds. Like we did in last March, they were planning a short trip to Hakone mountains to celebrate the birthdays of Mr. & Mrs. Omura, turning 60 and 77, both considered very significant age in Japanese tradition. Tokyo Bach Choir is short of tenors, so anybody who wants a Japanese Bach experience, just get there, and I am sure you will be welcomed with a big heart.

Prior to my visit to Tokyo as described above, Bach Choir Tokyo's musical director Ms. Emiko Omura sent us seasonal greetings responding to our July Newsletter and our concert information sent by Mr. Masanori Fujita November last year. She invites us to take part in her practise sessions whenever our members visit Tokyo.

Mr. Fujita also received a package of goods from the administrator of the choir including several copies of Tokyo Bach's December 2007 issue of monthly Newsletter introducing Bach Soc. QLD and our last two concerts: Haydn's Requiem/Cantata 2 & Handel's Messiah. Also enclosed were leaflets of their last Christmas concert and CD recording of the same concert entitled "Bach's Christmas Music", which took place on the 17th November 2007, their 101st concert. The choir also commemorated their 45th year last year.

Any member of Bach Soc. QLD who would like to have a look at the greeting card from Ms Omura, their newsletter, leaflet or listen to the CD, please ask Masanori, Kyoko or Yuri, Bach Choir Tokyo's address and contacts are as follows: bachchoirtokyo@soc.or.jp; 5-17-21-101 Funabashi, Setagaya-ku Tokyo; PH: 03-3290-5731/FAX: 03-3290-5732

クイーンズランド・バッハ協会ニューズレター「Bach in Five Minutes」
2008年4月号に掲載された原文と写真。筆者は奥の列、右から2人目。
(www.bachsocqld.org.au)

QLDバッハの藤田氏、来訪

私どもの合唱団とのパイプをつくってくださったクイーンズランド・バッハ合唱団の藤田正範氏(当「月報」2007年12月号でご紹介しました)が、去る4月21日、月曜日の目白の練習会場をご訪問くださいました。6月公演のカンタータの練習に参加され、練習後は、左段のドクター・ヨリ古野のケースを「ダ・カーポ」したことは、言うまでもありません。

このたび、メールでのお便りをいただきましたので、お伝えいたします。

2008/05/28

合唱団の皆様

先日は初めてお目にかかることができ、大変有難うございました。大変な歓待を頂き感動しました。心から厚く御礼申し上げます。

諸般の事情でようやく今月[5月]25日(日)帰豪して、26日の練習で合唱団の諸氏に東京での皆様との交歓ぶりを報告すると共に、沢山のお土産を披露させて頂きました。団員一同、大村ご夫妻様はじめ東京バッハ合唱団の皆様への厚情に感謝しております。これからも友好親善の輪を広げて行きたい、どうぞ宜しくお願い申し上げます。

将来友好のハーモニーを響かせられると良いですね!

合唱団へのカムバック報告が遅れたため、御礼のお便りが遅くなってしまいました。本当にすみませんでした。最後に6月のコンサートの成功を心からお祈り致します。

藤田正範 拝

東京バッハ合唱団 夏の行事予定

6月21日(土)

第102回定期演奏会

<開演> 14:00 (開場 13:30、終了 16:00頃)

<会場> めぐろパーシモン大ホール

- ・カンタータ第67番《留めよ心に 主イエスを》
- ・カンタータ第102番《主の目は 信仰を見たもう》
- ・カンタータ第169番《神にのみ わが心献げん》
- ・カンタータ第182番《あまつ君を 喜び迎えん》

<出演> 佐々木まり子(A), 鏡 貴之(T), 河野克典(B), 筒井淳子(Org), 大村恵美子/橋本眞行(Cond), 東京カンタータ室内管弦楽団(Orch)

<入場料> 3000円(前売・当日とも、全席自由席)

6月28日(土) 2008年度団員相談会(世田谷練習場 15:30~17:30、団員は全員ご出席ください)

7月7日(月)

創立46周年記念懇親会

<時間> 18:30 ~ 20:30

<会場> 目白聖公会(JR目白駅下車・歩7分)

座談会「天国と地獄」発話: 上村静氏(聖書学者・東京大学他講師、団友)

<参加費> 1000円(軽食代含む)現地でお支払い
お申し込みと会場地図ご請求は、事務局へ。

7月21日(月・祝日)

夏の特別演奏会

<開演> 16:00 (終了 17:30頃)

<会場> 世田谷中央教会

- ・カンタータ第8番《み神よ わが死はいつ》
- ・宗教歌曲《太陽は今や一日を終えて》BWV446 他
- ・カンタータ第131番《深みより 主よわれはなれを呼ぶ》
- ・カンタータ第191番《グロリヤ 高き天なる神に》

<出演> 光野孝子(S), 山田恵美子(フルート), 金澤亜希子(Pf), 東京バッハ合唱団

<入場無料> お仲間お誘い合わせでご来場ください。

8月1日(金)~3日(日)

野尻湖合宿(3泊4日、詳細は次号にてご案内します)

8月2日(土)

特別演奏会

<開演> 16:00 (終了 17:30頃)

<会場> 野尻湖国際村・神山教会

・7月21日のカンタータ3曲、他

<入場無料>

12月13日(土)

第103回定期演奏会(14時、杉並公会堂大ホール)

柳元 宏史

連載: 全部おすすめ 50 曲選!! <その 15>

カンタータ第26番

《はかなく むなしき 地なるいのち》

新卒の若い女性の伝道師が亡くなって4ヵ月がたつ。訃報を聞き唖然としたことを思い出す。葬儀に参列し、若い命が突然とりあげられたようで、遺影を仰ぎ「あまりにも若すぎる...」とつぶやいた。

今回ご紹介する曲は、世の空しさを徹底的に直視したミヒヤエル・フランク(17世紀ドイツの宗教詩人・作曲家)のコラール「はかなく むなしき 地なるいのち」に基づくカンタータである。この詩は、政治的思惑と宗教とが結びつき、泥沼化したドイツ三十年戦争(1618-1648)の直後に作られている。多くの血が流れたのだろう。この世の見えるものを追い求めた結果がどのような悲惨な結末であったかを、自省的に如実に伝える内容である。

しかし、それとは対照的に、曲調は全体的に軽快で流麗である。なぜだろう。どうしてバッハはこのような旋律を付したのだろうか(1724年11月、三位一体節後第24日曜日、ライプツィヒ初演)。そんな疑問をかかえつつ聞き続けているうちに、答えは最後のコラール(第6曲)にあるのでは、と思いついた。

はかなく むなしき 人の世すべて

見るもの 過ぎ去る

主を畏る者 とどまらん とわに

と穏やかに結ぶ。確かにこの世の生は、明日はしおれる草のようであるかもしれない。砂をかむような毎日のくり返しであるかもしれない。それでも希望がただ一つある。それが「主を畏れ、愛する」ことなんだ、というのである。

この信仰の姿勢はパウロが説き、宗教改革者ルターも信仰教育において大切にされたものである。バッハはこの結論にすべてを集中させたのかもしれない。どんなに理解不能の出来事だらけであろうと「主を畏れ、愛する」こと。彼自身がそのような思いでライプツィヒの日々を過ごしていたのであろうか。この信仰のみが朽ちることのない希望であると信じたのだろう。いかであらうと、キリストの方向に向う信仰が結論的に迫ってくる印象深いカンタータである。

ある牧師が、この若い伝道師の最期をつぎのように言っていた。「彼女はイエス様の方向へ向って、あらん限りの力を出し切って倒れていったのだろう」と。来るべき日、すでに神の国でとわに憩う彼女と、笑顔で「やあ」と手をあげて再会できることを思い描いている。

(やなぎもと・ひろし, 東京神学大学大学院・団員: パス)

CD「バッハ・カンタータ50曲選[第3巻]」に収録。S 光野孝子, A 佐々木まり子, T 平良栄一, B 渡邊明, 大村恵美子指揮・東京バッハ合唱団, 東京カンタータ室内管弦楽団。2003年録音(第93回定期演奏会・石橋メモリアルホール)。

楽譜: 東京バッハ合唱団/ブライトコプフ「50曲選」No.8